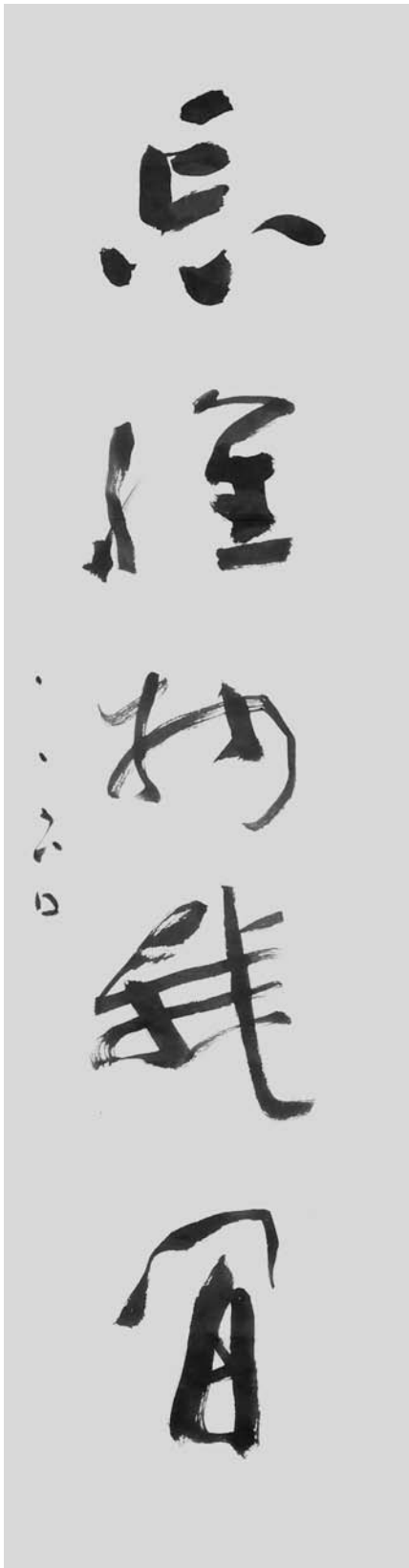


条幅部自由参考

7月25日正午必着

明石春浦先生書



忘懐物我間かいにわするぶつがのかん（徐鉉）  
 こころに我と人とを忘れ無我の境に入るのである。

明石幸子書



縁先におかれた蘭の鉢。壁の剥げ落ちた土蔵。その上の夏の空。（挽歌・中村稔）



西 墨濤先生書

条幅部創作課題

四種の詩文から一種を選択して出品のこと。

偶因<sup>くういん</sup>煩熱<sup>はんねつ</sup>便思<sup>べんし</sup>家<sup>か</sup>

千里<sup>せんり</sup>江南<sup>こうなん</sup>道路<sup>どうろ</sup>賒<sup>せ</sup>

門外<sup>もんがい</sup>綠楊<sup>りよく</sup>三十頃<sup>さんじゅうさんけい</sup>

西風<sup>せいふう</sup>吹滿<sup>ふきみつ</sup>白蓮<sup>はくれん</sup>花<sup>はな</sup> (鄭<sup>てい</sup>燮<sup>しやう</sup>)

窓下有<sup>そうか</sup>清風<sup>せいふう</sup> (白居易)

窓下<sup>そうか</sup>清風<sup>せいふう</sup>有り

窓辺に清風がおとずれる。

青山<sup>せいざん</sup>如<sup>ごと</sup>故人<sup>こじん</sup>江<sup>かう</sup>水<sup>すい</sup>似<sup>ごと</sup>美酒<sup>めいしゆ</sup> (文 點)

青山<sup>せいざん</sup>故人<sup>こじん</sup>の如<sup>ごと</sup>く、江<sup>かう</sup>水<sup>すい</sup>美酒<sup>めいしゆ</sup>に似<sup>ごと</sup>たり。  
今日<sup>けふ</sup>重<sup>おも</sup>ねて相<sup>あ</sup>逢<sup>あ</sup>う、酒<sup>さけ</sup>を把<sup>と</sup>つて良<sup>よ</sup>友<sup>とも</sup>に對<sup>たい</sup>す。

故人は昔なじみの友。なつかしい兩岸の青山をながめ、江を渡りつつ舟中で酒を酌みかわす。

送<sup>ゆうじん</sup>友人<sup>ゆうじん</sup>下<sup>か</sup>第<sup>だい</sup>歸<sup>き</sup>觀<sup>くわん</sup> (劉<sup>りう</sup>得<sup>とく</sup>仁<sup>にん</sup>)

友人<sup>ゆうじん</sup>の下<sup>か</sup>第<sup>だい</sup>して歸<sup>き</sup>觀<sup>くわん</sup>するを<sup>おく</sup>送<sup>おく</sup>る 劉<sup>りう</sup>得<sup>とく</sup>仁<sup>にん</sup>

君<sup>きみ</sup>此<sup>こゝ</sup>卜<sup>とく</sup>行<sup>こう</sup>日<sup>ひ</sup> 高<sup>こう</sup>堂<sup>どう</sup>應<sup>おと</sup>レ夢<sup>む</sup>レ歸<sup>き</sup>

君<sup>きみ</sup>此<sup>こゝ</sup>に<sup>こゝ</sup>行<sup>こう</sup>を<sup>と</sup>す<sup>る</sup>日<sup>ひ</sup> 高<sup>こう</sup>堂<sup>どう</sup> 応<sup>おと</sup>に<sup>かえ</sup>歸<sup>き</sup>るを<sup>ゆめ</sup>夢<sup>む</sup>む<sup>べし</sup>

莫<sup>な</sup>下<sup>げ</sup>將<sup>しょう</sup>和<sup>わ</sup>氏<sup>し</sup>淚<sup>なみだ</sup> 滴<sup>た</sup>著<sup>ちやく</sup>老<sup>らう</sup>萊<sup>らい</sup>衣<sup>い</sup>上<sup>の上</sup>

和<sup>わ</sup>氏<sup>し</sup>が<sup>なみだ</sup>涙<sup>なみだ</sup>を<sup>も</sup>つて 老<sup>らう</sup>萊<sup>らい</sup>の<sup>い</sup>衣<sup>い</sup>に<sup>た</sup>滴<sup>た</sup>着<sup>ちやく</sup>する<sup>こと</sup>莫<sup>な</sup>か<sup>れ</sup>

嶽<sup>がく</sup>雨<sup>う</sup>連<sup>れん</sup>レ河<sup>か</sup>細<sup>さい</sup> 田<sup>でん</sup>禽<sup>きん</sup>出<sup>で</sup>レ麥<sup>むぎ</sup>飛<sup>と</sup>

嶽<sup>がく</sup>雨<sup>う</sup>に<sup>れん</sup>連<sup>れん</sup>な<sup>つて</sup>細<sup>さい</sup>く 田<sup>でん</sup>禽<sup>きん</sup> 麦<sup>むぎ</sup>を<sup>い</sup>出<sup>で</sup>て<sup>と</sup>飛<sup>と</sup>ぶ

到<sup>い</sup>家<sup>か</sup>調<sup>てう</sup>膳<sup>ぜん</sup>後<sup>のち</sup> 吟<sup>ぎん</sup>好<sup>よ</sup>送<sup>おく</sup>斜<sup>しゃ</sup>暉<sup>き</sup>

家<sup>か</sup>に<sup>い</sup>到<sup>いた</sup>りて 調<sup>てう</sup>膳<sup>ぜん</sup>の<sup>ち</sup>後<sup>のち</sup> 吟<sup>ぎん</sup>は<sup>よ</sup>好<sup>よ</sup>し斜<sup>しゃ</sup>暉<sup>き</sup>を<sup>おく</sup>送<sup>おく</sup>るに

晝<sup>か</sup>ながら 幽<sup>かす</sup>かに光<sup>あ</sup>る 螢<sup>へい</sup>一<sup>いつ</sup>つ 孟<sup>まう</sup>宗<sup>そう</sup>の藪<sup>さぶ</sup>を<sup>い</sup>出<sup>い</sup>でて<sup>て</sup>消<sup>け</sup>えたり (北<sup>ほく</sup>原<sup>げん</sup> 白<sup>はく</sup>秋<sup>しゅう</sup>)

半紙部規定課題A

7月25日正午必着

過 沙  
汀 寒  
鹿

※作品には必ず落款を入れてください。

明石春浦先生書

※課題A(楷書)と課題B(四体の中より一書体選択)の二点を出品のこと。

半紙部規定課題B

7月25日正午必着

行書



隸書



明石春浦先生書

草書



行草書



露の白くおりるころ、草はなおも青々と茂る 淮水を行く舟は岸によりそって碇泊する  
 風に帆をかけて、彼方、此方へ向かう旅人 空には天の川、地上には淮水、それぞれにきらめく星  
 樹木は静まって、鳥は草の中に眠り 岸の砂は冷たく、鹿が汀を駆け過ぎる  
 明日の朝、私と連れだって まっすぐに大海に浮ぼうという人はないものだろうか

秋夜宿淮口

景池

露白草猶青  
 淮舟倚岸停  
 風帆幾處客  
 天地兩河星  
 樹靜禽眠草  
 沙寒鹿過汀  
 明朝誰結伴  
 直去泛滄溟

秋夜 淮口に宿す 景池

露白くして 草は猶お青し

淮舟 岸に倚りて停まる

風帆 幾処の客

天地 両河の星

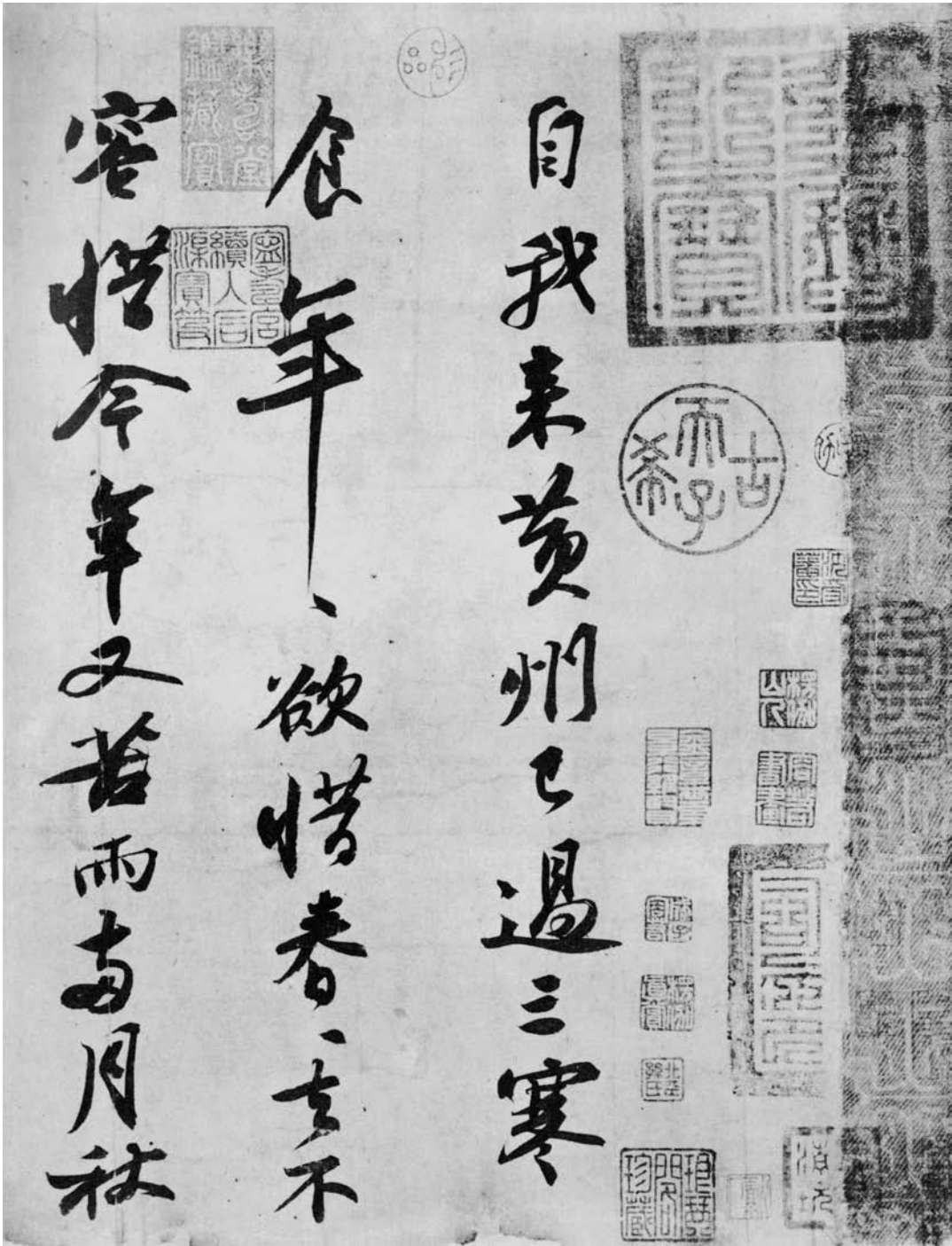
樹静かにして 禽は草に眠り

砂寒うして 鹿は汀を過ぐ

明朝 誰か伴を結び

直ちに去って 滄溟に泛ばん

条幅部半紙部臨書課題



自我来黄州 已過三寒食 年々欲惜春 春去不容惜 今年又苦雨 两月秋 (蕭瑟)

我れ 黄州に來りし白り 已に三たびの寒食を過せり 年々春を惜しまんと欲すれども 春去って 惜しむを容れず 今年 又た雨に苦しむ 两月秋 (蕭瑟たり)

7月25日正午必着



我れ 黄州に來りし自り 已に三たびの寒食を過せり 年々春を惜しまんと欲すれども



我れ 黄州に來りし自り

宋 蘇軾・黄州寒食詩卷

蘇軾は宋代の景祐三年（一〇三六年）十二月十九日、眉山（四川省）眉山県に生まれた。字は子瞻。東坡居士・鉄冠道人・雪浪齋などと号した。北宋を代表する文人で、詩は宋代第一とされ、文は父の蘇洵、弟の蘇轍とともに唐宋八家の一人にあげられている。書は黄庭堅・米芾・蔡襄とともに宋の四大家とよばれる北宋書壇の大御所であり、墨竹も有名である。

嘉祐二年（一〇五七）、官吏登用試験（科挙）に合格して進士となり政界に身をおいたが、幾度となく中央政界から地方転出や流罪などの憂目にあい、元符四年（一一〇一）大赦をうけて帰郷する途中に病死している（六十五才）。

彼の書は若年期には王羲之に傾倒し、特に蘭亭叙をよく学んだといわれている。この時期には行・楷の作が多く、書風はいたっておとなしい。中年期は顔真卿・楊凝式を学んだ時期であり、作風は自由でたくましい。晩年の書は伝えられるものが少ない。

この黄州寒食詩卷は、彼が黄州（湖北省）に流されている時につくった詩二首を書いたもので（四十七才頃）、豊かな人間性が自然のままににじみでていて、力みや乱れは少しもなく、力強く奔放な筆致は彼の会心の作であろう。（春濤）

7月25日正午必着

教育部毛筆



げん そ き ごう  
元 素 記 号

中学一年

雨宮春聲先生書



こう こ がく しゃ  
考 古 学 者

中学二三年

菅井松雲先生書

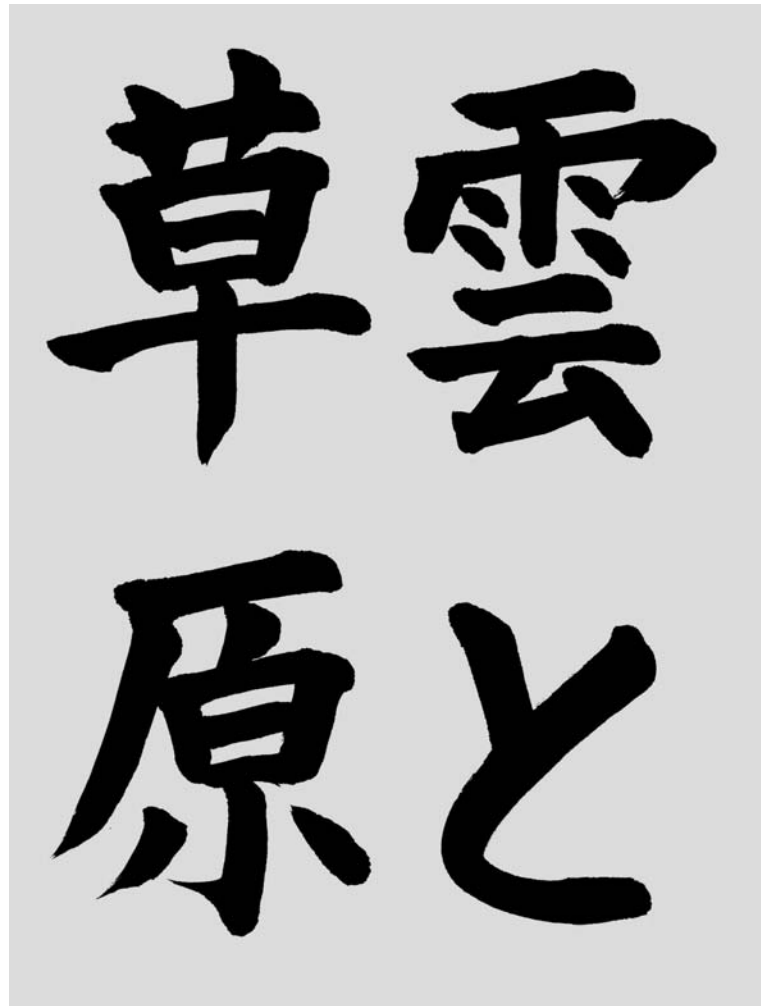
※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



いわな  
岩魚つり

小学五年

藤井良泰先生書



くも そうげん  
雲と草原

小学六年

森戸春濤書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



7月25日正午必着



細谷春誠先生書

こぶね

小学三年



榎戸春龍先生書

たけとんぼ

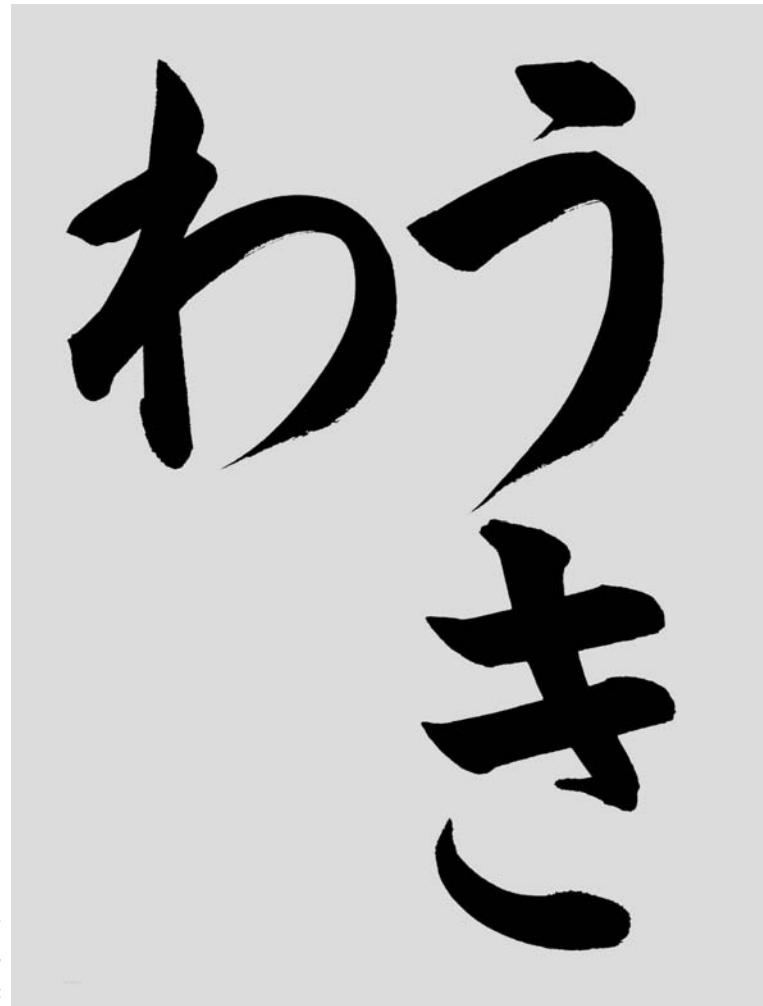
小学四年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



明石幸子書

ふ ろ 小学一年・幼年



藤田幸春先生書

う き わ 小学二年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

海べのさんぽ道から  
 白いとう台が見える

小学五年

小川の流に合わせて  
 水草たちがまいおどる

小学六年

梅干してあたりにももの  
 の影のなき、風生白

中学

朝もやにつゝまれた海辺  
 を愛犬と散歩する

一般(級位)

庭の面はまだわかぬに夕立の  
 空さげなく澄める月かな

一般(段位)

庭の面は 庭の面は まだかわかぬに 夕立の 空さげなく 澄める月かな (従三位・源頼政)

明石幸子書

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。  
 また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。

る	み
	つ
か	に
ぶ	
と	あ
む	つ
し	ま

幼年

も	さ
の	ば
は	く
	の
水	た
で	か
す	ら

小学一年

川	さ
に	さ
	の
な	小
が	ぶ
そ	ね
う	を

小学二年

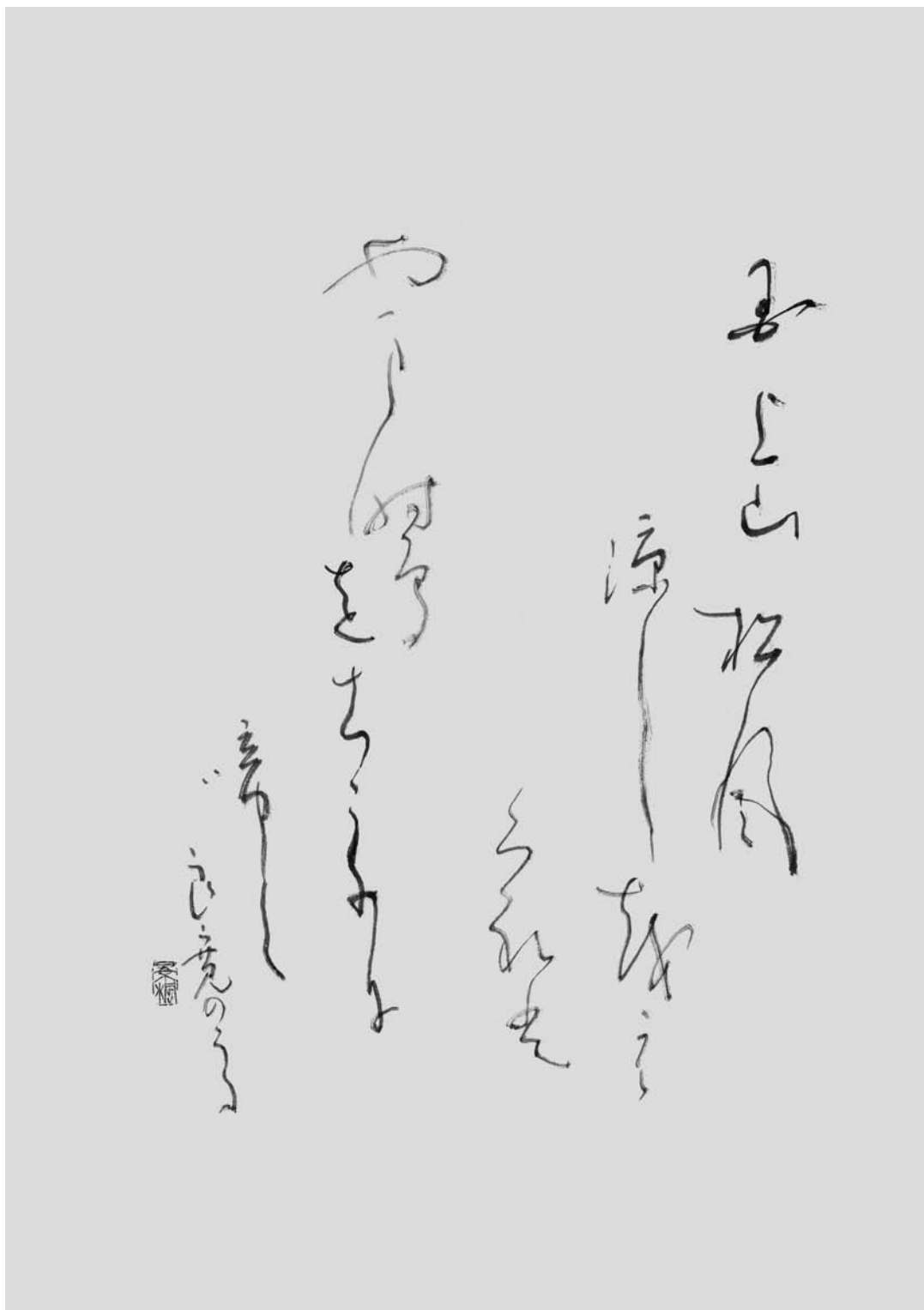
え	あ
た	わ
	に
人	な
魚	つ
ひ	て
め	消

小学三年

音	森
が	の
聞	お
こ	く
え	か
て	ら
き	笛
た	の

小学四年

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。  
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。



岩本景楓先生書

国<sup>く</sup>上山<sup>がやま</sup> 松風涼し 越えくれば<sup>礼盤</sup> やま時鳥<sup>万</sup> をち<sup>速</sup>近<sup>ち</sup>ちに啼<sup>千</sup>く (良寛)